慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本の「三国志」受容における二つのリアリティー : 北方謙三と宮城谷昌光の両極性
Sub Title	Two realities in the reception of "Sangokushi" in contemporary Japan : polarity of Kenzo Kitakata and Masamitsu Miyagitani
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sōsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.37 (228)- 52 (213)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本の「三国志」受容における二つのリアリティー

――北方謙三と宮城谷昌光の両極性――

吉永　壮介

一、序言

「三国志」をめぐる長編小説群のなかで、北方謙三（一九四七～）『三国志』と宮城谷昌光（一九四五～）『三国志』は西暦二〇〇〇年を挟んで双璧をなす。北方『三国志』は、一九九六年十一月から九八年十月にかけて、角川春樹事務所より全十三巻で単行本として刊行された。宮城谷『三国志』は、『文藝春秋』二〇〇一年五月号から二〇一三年七月号まで百四十五回にわたり連載され、文藝春秋より全十二巻で単行本として刊行された。いずれも長大な物語であるが、[1] 二年と十二年という執筆期間の大きな差が、北方『三国志』の疾走感のある文体と、宮城谷『三国志』の着実な語り口に反映されている。[2]

北方・宮城谷『三国志』は、明代の白話小説『三国志演義』、および吉川英治『三国志』を評価しつつも違和感が存在することを執筆の動機とする点が共通する。『三国志演義』について、北方氏は「怪しい」、宮城谷氏は「隠蔽」「歪曲」「不自然」「嘘」等の違和感があると述べる。[3] 吉川『三国志』については、北方氏は、劉備が「初めから終わりまでずっと偉い人

のまま」描かれていることや、尊皇思想の語り口が古びて見えることに違和感を覚えたとする（北方『英傑』一六～一九頁）。一方、宮城谷氏は、吉川『三国志』が『三国志演義』を下敷きにしていることを指摘し（宮城谷『読本』一四頁）、「『三国志』は、誰も書かなかったかたちのものにしたい。吉川英治さんの『三国志』とともに読まれるようなものを書いてみたい」（宮城谷『読本』三〇頁）と執筆の動機を語っている。

北方・宮城谷両氏は、ともに正史『三国志』に準拠して構想したことを標榜しており（北方『読本』一八頁、宮城谷『読本』九五頁）、その結果、両氏とも物語の冒頭に「桃園の誓い」を採用しない[4]。しかし、北方氏はその取捨選択について、舞台には良いが小説のリアリズムにはそぐわないことを理由に挙げる（北方『読本』一九頁）。

宮城谷氏は自身の作品を「時代小説」ではなく「歴史小説」であると規定する。そして「歴史小説」を「個人ではなく、時代を書くというものです。時代のなかで人間は動くということなのです」（宮城谷『読本』一五頁）と定義し、その代表的作家である司馬遼太郎氏によって、理知的・合理的アプローチの作品が成立したと指摘する（宮城谷『読本』対談「井上ひさし――歴史小説の沃野　時代小説の滋味」一五八～一五九頁）。この合理的という言葉の含意を物語中に置けば、ストーリーや登場人物の心理や行動、事件の顛末の解釈への整合性、そしてリアリティーということになろう。

本稿では、小説というメディアにおける北方・宮城谷『三国志』のリアリティーについて、そのパラダイムと創作上の技法を比較して考察する。

二、物語の枠組について

時間的・空間的に切れ目のない史実のどこに枠組を当てはめて物語を構成するかは、作者の世界観を端的に提示する。『三国志演義』は黄巾の乱（一八四年）から始まり、五丈原での諸葛亮の死（二三四年）を経て、晋による天下統一（二八〇年）までを描く。

北方『三国志』は黄巾の乱から諸葛亮の死までの約五十年間を描く。物語冒頭で劉備・関羽・張飛が登場し、次の章で曹

操と孫堅が登場する。一方、宮城谷『三国志』は楊震（五四～一二四年）の「四知」のエピソードから起筆し、司馬昭の死（二六五年）をもって擱筆するまでの約百五十年を対象とする。曹操や劉備の登場は第二巻半ばの「曹騰」「争臣」の章である。

宮城谷氏が「歴史小説」の執筆にあたる姿勢は、

（略）私は『三国志演義』を忘れるということからはじめた。つぎに後漢という時代をできるかぎり正確に知ろうとした。王朝そのものが盛衰の原因である、と考え、個人の善悪の力を必要以上に擢用しないことをこころがけた。（略）曹操を知るためには、祖父の曹騰を知らねばならぬということであり、曹騰が宦官であるかぎり、宦官を識る必要があり、宦官に権力を与えた垂簾政治を理解しなければならない。（宮城谷（一）「後漢という時代」三七七頁）

という言葉に示されている。宮城谷氏は、「三国時代の扉を開いたのは、私は楊震だと昔から思っているんですよ」（宮城谷『読本』三九頁）、「そのあたり（筆者注：楊震と梁冀）に『三国志』の原点があるとすれば、自分は先蹤をたどらない作品を創ることができるだろう」[5]（宮城谷（十二）「あとがき」四四五頁）と着想の由来を語る。そして、「一州を取ることのむずかしさは、戦後にある。（略）戦略よりも戦後の行政のほうが、はるかにむずかしい。そのことを曹操は知っている」（宮城谷（六）「袁譚」一一頁）、「劉備のしている戦いや移動、権謀術数ばかりではつまらない。国の政治にこそ、定着した人間の苦悩があり、喜びがあります」（宮城谷『読本』八〇頁）という思想が全編を貫いている。宮城谷『三国志』で初めて本格的な戦闘描写がなされるのは、第二巻末「黄巾」の章における皇甫嵩と黄巾賊の戦いを待たねばならない。

一方、北方『三国志』は、冒頭から末尾まで、戦争を紡ぐ物語として駆け抜けている。例えば、猛将・張飛について言えば、宮城谷『三国志』では、長坂坡の戦いと巴蜀進攻の場面しか活躍の場を与えられていないが、北方『三国志』では劉備以上とも思われる熱意をもって、戦闘、調練、野戦料理、妻帯と日常生活、心の内面にいたるまで描破されている。

北方氏が赤壁の戦いへの孫権の決断に三国志の物語世界の完成を見るのに対して（北方『英傑』一一五頁）、宮城谷氏は楊震に三国志の揺籃期を見て、劉備と諸葛亮の隆中対に三国時代の現出を措定する（宮城谷（六）「三顧」）。その視座の相

違が、時間軸と登場人物の設定における大きな差異を規定した。ともに正史準拠を標榜するが、北方『三国志』は戦争と武将を描く物語であり、宮城谷『三国志』は政治と文官に主眼を置く物語である。このアプローチのコントラストは、「三国志」の長編小説が拠って立ち得るところの二つの極点を明確に示している。

三、歳月・年齢・経験による進化・変化について

北方・宮城谷『三国志』とも、歳月の流れ、人物の年齢の変化に敏感である。北方『三国志』の曹操は、「終ったことを、くどくふり返る。そういうことが、多くなったような気がした」と述懐する（北方（八）「曇天の虹」二三九頁）。宮城谷『三国志』も、「馬超はまだ三十六歳で、曹操より二十一歳も下である。曹操の覇業にとって、いまや歳月さえも障害になりつつある。叛逆者の若さは、初老の曹操には脅威である」（宮城谷（七）「雨矢」一五三頁）といった具合にしばしば年齢を意識させる。歳月・年齢に対する注目は、経験の蓄積による成長や個性の変容への関心とも連動する。「学習し、努力し、工夫をおこたらぬ者のみが、人として成長するのであるとおもっている曹操は、徐晃の進言を喜んで容れ、韓範の再度の降伏を許した。この一事は、徐晃の将器をさらに大きくしたといえるであろう」（宮城谷（六）「袁譚」二一頁）という一節は、学習と経験、そして人との関わりによって、思想的にも具体的な行動においても進化が見られることへの評価である。宮城谷『三国志』は諸葛亮や司馬懿の将帥としての才略についても、天性の才能ではなく経験による「成長」を評価する（宮城谷（九）「陳倉」、（十）「長雨」）。また、攻城戦の経験がある隊が城壁を登ることに長けていたとする等（宮城谷（六）「高幹」）、組織・集団の経験値による成熟にも言及する。

宮城谷『三国志』がとりわけ焦点を当てるのが曹仁である。曹操の有能な幕僚として物語初期から活躍する曹仁であるが、周瑜との戦いで江陵の城を放棄したことで華々しい戦歴に傷がつき、そのトラウマと向き合う内面がたびたび描写される（宮城谷（七）「馬超」、（八）「関羽」）。成長と挫折に伴う内面の変化に焦点を当て続ける意匠は、中国古典の通俗文芸の世界にはなじまない現代的な視点である。

北方『三国志』は張衛に重要な役回りを与えている。張衛は兄・張魯を教祖に戴く五斗米道の力を利用して天下取りの野望を抱くが果たせず、やがて急転する時勢から落伍し、ついには馬超をして「いまの張衛は、どこか違う。いやな感じがこみあげてくる」、「乱世が取り憑いた男だな」、「薄汚れた男になったな」（北方（十一）「戦塵の彼方」七四、八五、九〇頁）とまで言わしめるほど人格的に崩れ、「張衛は、疲れきっていた」（北方（十三）「山に抱かれし者」九三頁）ところにまで零落してゆく。なお、馬超は張衛以上に時間の経過とともに振る舞いを変化させるキャラクターであるが、北方『三国志』における最も特異な人物形象であるため、後節で詳述する。

概して言えば、『三国志演義』『水滸伝』等の中国古典の通俗白話小説の登場人物は、時間の経過や事件との遭遇によっても、根本的な変化をしないフラットなキャラクターとして造形されている。『三国志演義』で大暴れする張飛像に対する北方氏の「中国というのは極端だから、荒っぽい奴はどこまでも荒っぽいんだ。どこまでもどこまでも荒っぽくて、死ぬまで荒っぽい」（北方『読本』四八頁）という評は、中国古典通俗文芸におけるキャラクター論として妥当である。この点に対する違和感、言い換えれば現代人としてのリアリティーの所在への回答の一つが、時間の経過や老いを意識し、経験によって行動を変化させる登場人物という形でなされていると言えるであろう。

四、数値の明示について

北方『三国志』には数値の詳細な描写が数多く見られる。物語の最冒頭の、

六百頭の馬。むかってくる。まるで馬ではない別のもののように見えた。地そのものが動いている。二十六騎のうち、十六騎が横に回った。馬群の後方にいる数十騎。土煙を浴び、顔を伏せている者が多い。（北方（一）「馬群」九頁）

という描写が象徴するように、物語全般で人数や距離を明示する記述がしばしばなされる。正史には見られない数値のディテールを示すことによって、具体的な輪郭と映像的な躍動感を読者に提示することを常套とする。

一方、宮城谷『三国志』の数値の明示は、

さきほど万里といったが、より正確には日南まで九千余里であり、一日の軍行を三十里とすれば、到着までに三百日はかかる。兵が食べる稟を計算してみると、六十万斛必要となる。その計算には将吏がつかう驢馬の食をいれていないのである。

（宮城谷（一）「寵栄」二九九頁）

のように、合理的な数値を算出する方向に向かう。当時の人口についても建康元年に関する詳細な記述があるが（宮城谷（一）「順帝」）、それは『後漢書』志第二十三「郡国五」日南郡の注に拠る。また、爵位の授与に伴う封邑の加増についても、正史に拠りつつ随所に綿密に記している。

両氏ともリアリティー付与のために数値の具体的な描写に留意しているが、北方『三国志』は筆者のイメージの具現化、宮城谷『三国志』は正史からの抜粋であり、そのベクトルは大きく異なっている。

五、女性キャラクターと日常性・非日常性の付与について

北方『三国志』は、「帝論（尊皇思想）」を主軸として、「男」の「夢」「志」「生」「死」を描くが、すべてを非日常の物語として飛躍させるのではなく、地に足の着いた人間味の感じられる人物像の構築を目指す。そのリアリティーを確保する技術的な選択が、食事・兵站を「しつこいほどに何度も」（北方『英傑』一五八頁）描き込み、家族・育児といった日常の風景を取り込むことにある。北方『三国志』では妻帯がとりわけ重要なキーワードとなる。張飛・呂布・周瑜・馬超等の家庭生活がしばしば描かれ、簡雍・馬忠・爰京等は妻帯していない旨をわざわざ明記される。張飛・呂布・馬超の妻はいずれも架空の人物であり、また諸葛亮の妻は史実では名士である黄承彦の娘であるが（『三国志』巻三十五「諸葛亮伝」注引『襄陽記』）、北方『三国志』は隆中の村の長の娘である陳倫を娶ったと設定し、政治から距離を置く庶民的な女性を妻に配している（北方（八）「野の花」）。

一方、宮城谷『三国志』の女性は、男性キャラクターと同様に正史から抜粋される。例えば、冒頭近くから物語を牽引する鄧太后をはじめ、甄夫人（宮城谷（七）「雨矢」）、姜叙の母（宮城谷（九）「曹真」）、夏侯令女（宮城谷（十一）「王淩」）、

許允の妻の阮氏（宮城谷（十一）「掃除」）、そして全公主（宮城谷（十二）「孫亮」）等の逸話が、まるで「列女伝」の一幕であるかのように物語に挿入される。

北方『三国志』においては、張飛の妻・董香や馬超の妻・袁綝が、夫のアイデンティティーに共鳴して相互に影響を与え、物語の進展に大きく関わる。「夢」と「志」という観念的な世界に生きる「男」たちのプライベートを描くことによって日常から乖離させない機構として、架空の女性キャラクターが描き込まれている[6]。それに対して宮城谷『三国志』の女性は、夫や息子の公的な政治・軍事的事件を補完する役割を担って登場する。それは非日常で鮮烈な史実の一幕を彩るパーツとしてであり、多くの場合、継続的に物語を担う立ち位置は与えられない。両作品に描かれる女性たちは、異なる要請のもとで物語に登場していると言えるであろう。

六、リアリティー確立の二つの方向性について

前節まで、物語が読者に与えるリアリティーという観点から論じてきたが、本節では物語内の登場人物自身が、いかに物語内の出来事にリアリティーを感じるよう構成・執筆されているかについて考察する。

宮城谷氏は正史を丹念にたどり、奏聞や上奏文に多くの紙幅を割くことを厭わない[7]。諫争以外にも、文官の政治的発言や会話を正史から抜粋している場面は数多く、当時の言説の忠実な再現を志向する。また、宮城谷氏は『三国志』執筆以前、すでに十年以上にわたり春秋戦国時代に取材した歴史小説を手がけており、後漢末・三国時代における「現在」のあり方を春秋時代と比較して考える場面が頻出する。例えば、

春秋時代の再現が望ましいとなれば、天子を否定せずに諸侯を総攬する覇者の存在がどうしても必要となる。困窮した周王を援けた晋の文公すなわち重耳をいまの世で求めるとすれば、曹操を措いてほかにはいない、というのが董昭の見識であった。

（宮城谷（五）「新都」七四頁）

という一節からは、春秋時代の歴史に論拠を求めた行動をとることを妥当とする当時の常識・論理を、正史から抽出する姿

勢が見える。また、梁冀による質帝殺害の場面では、

天子が皇帝と称するようになってから、輔弼の位にある者がみずから皇帝を殺害したのは、秦の二世皇帝を襲って自殺させた趙高と、前漢の平帝を毒殺した王莽がいる。ここで梁冀は中国史上最悪といってよい臣に、悪徳においてならんだのである。

（宮城谷（二）「急逝」二五頁）

と述べ、当時の人が知りうる前例に鑑みて判断をくだしている。同様の例は桓帝が宦官に梁冀の打倒を謀る場面にも見える（宮城谷（二）「五侯」）。そうした過去の史実の照会のほかにも、党錮の禁における李膺の最後の言葉が『春秋左氏伝』『論語』を踏まえていることに触れる等（宮城谷（二）「党錮」）、先達の思想や歴史の典故がちりばめられており、後漢末の人々の教養の拠って立つところに光を当てる意欲が旺盛である。当時の視野の範囲内で物語を構築する姿勢を堅持し、当時の人の臨場感を物語中に醸成することが、宮城谷氏の「歴史小説」におけるリアリズムである。

一方、北方『三国志』では、四百年続く漢王朝の血統と権威、そして劉備・曹操・司馬懿等の出自の説明を除けば、後漢以前の事情が語られることはほとんどない。北方『三国志』は、「尊皇思想」「夢」「志」「死」という概念をプラットフォームとして、登場人物の相関図を物語内で創造・構築する。それは見方を変えれば、後漢末当時に形成されつつあった儒教的教養を共有する身分・階層としての名士層の不理解、という側面を持つ。例えば、漢王朝存続をめぐる曹操と荀彧の確執は繰り返し描かれるが（北方（二）「流浪果てなき」、（四）「わが立つべき大地」、（六）「天地は掌中にあり」、（七）「病葉の岸」、（八）「長江の冬」）、君主権力と名士層の相克という史学的な文脈から遊離して、老境による頑迷さを理由とする決別といった処理へと次第に傾斜してゆく（北方（八）「乱世再び」、「曇天の虹」）。そして、荀彧との破局に臨んだ曹操は、「服従か、死か。自分はそうやって荀彧に接し、荀彧は最後に死の方を選んでしまった」（北方（八）「新しき道」）と述懐する。ここにいたる伏線として、曹操はたびたび「服従か死か」という自身の対人関係のあり方を自覚してきた（北方（二）「流浪果てなき」、（五）「制圧の道」、（六）「知謀の渦」、（九）「荊州の空」）。荀彧の死は、史実から見れば、老いによる確執の深化や曹操個人の特質で処理できる問題ではないが、北方『三国志』は史実の軛に縛られず、現代人の目線によるドラマ

として人物と事件を描出する。

北方『三国志』の登場人物たちは、後漢以前の歴史をふり返る、という選択肢を持たない。彼らは物語内における人と人との関係性に基づき、すべてを認識・判断する。物語内にすべてのリアリティーを求めるとも言えるこの姿勢は、先述した時間の経過や年齢に敏感であることとも関連する。北方『三国志』では、とりわけ物語中盤以降、登場人物が赤壁の戦いや、呂布・周瑜の死を回想する場面が顕著に増加する。それは物語内で蓄積された人物や事件の経験・記憶が、登場人物にとっての判断・行動の基準として稼働しはじめたことを示している。宮城谷『三国志』の人物が春秋時代以来の過去の典故・教養に基づいて判断をくだすのに対して、北方『三国志』の人物は物語内での回顧と既視感の多用、言い換えれば物語内に蓄積された事象のデータベースへの照合に、判断・行動の必然性や合理性の保証を求める。

ところで、宮城谷氏は司馬遼太郎氏の創作技法について、

> 司馬さんは、常に「個」を書くのではなく、「個」と「個でないもの」、あるいは「個」と「組織」を対比してみせた。これまで使われていた表現的なコントラストではなく、存在そのもののコントラストのつけ方を発明したともいえます。
>
> （宮城谷『読本』対談「江夏豊――司馬遼太郎真剣勝負」二六二頁）

と指摘する。この組織論からの照射とも言える歴史叙述は、宮城谷『三国志』において、「梁冀の哀しさは、組織を破壊する者ではなく腐敗させる者だということである。その点、かれは死ぬまで組織の外にでられず、組織の毒をかぶることになる」（宮城谷（二）「虎狼」七一頁）、「極言すれば組織は賞罰の不公平さから崩れてゆくのである。罰するより賞するほうがむずかしい。桓帝が宦官を過度に厚遇したことで、国権が宦官に帰し、朝廷が日に日に乱れてゆくことになる」（宮城谷（二）「五侯」一六二頁）といった形で諸処に顕在化する。また、劉備軍団における関羽・張飛の存在が大きすぎることに趙雲や徐庶が違和感を覚え（宮城谷（三）「界橋」、（六）「田疇」）、徐庶が諸葛亮との関係から劉備のもとを去ることになったとする（宮城谷（六）「魯粛」）のも、組織論的観点から宮城谷氏が導き出した合理的解釈である。

こうした「組織」への眼差しと、当時の人の視点の再現という視座とが相俟って、「個」の偏重に対する宮城谷氏の視線

は厳しい。吉川英治『三国志』を評価しつつも、

吉川さんがお書きになったものは、正史ではなく、あくまで演義（通俗小説）をもとにしていて、曹操、孫権、劉備といった登場人物たちの個性の中に、すべての出来事を起因させる書き方がされていますよね。これは時代小説ではあるけれど、歴史小説ではないのです。（略）集団的な何かによって人は動かされている。人間というより、もっと大きな「時代」とでもいうべきものによって、歴史はつくられてきました。

（宮城谷『読本』「項羽と劉邦、激動の時代――ふたりを動かした英雄たちと歴史的必然」四五二～四五三頁）

かく述べるにいたって、物語中の「個」と「個」の関係性に依存してリアリティーを確保する北方『三国志』との対峙は明確になる。宮城谷氏からすれば「歴史小説」としては誤謬とされる手法が、北方『三国志』においては確信犯的に正当な手法として用いられている。

宮城谷『三国志』は、当時の人が見た後漢末・三国時代の厳格な再現を志向する。そのための技法として、過去からの思想や組織の脈絡をたどり、そこに物語中の「現在」の信憑性を委ねている。それは物語の根拠を物語の外へと求めてゆく姿勢であると言い換えてもよい。一方、北方『三国志』は、現代人の目から見る物語を躍動感をもって描くことを主眼とする。そのために、史実の文脈を背負わされぬ個人が物語内で織りなす関連性によりリアリティーを確立する手法をとる。物語外への典拠の追求と、物語内での完結性の構築という二つのリアリティーの位相が、極めて近い時期に自覚的に示されたことは[8]、「三国志」の長編小説というジャンルにおける一つのエポックを画したと言えるであろう。

七、北方『三国志』の馬超について～ねじれの位置のパラダイム

宮城谷氏が「歴史小説」としては嫌忌する「個」の描写への偏重が、極限の状態で体現されているのが北方『三国志』の馬超である。剣の名手である馬超は、張飛をして「絶望の剣。悲しみの剣」（北方（九）「たとえ襤褸であろうと」三八頁）、「おまえの剣、呂布の方天戟とやり合わせてみたかった。両方とも、どこか悲しいな。天下とも夢とも関係なく、ただ強い

だけだ」（北方（十）「去り行けど君は」一七一頁）と評せしめた。北方『三国志』の馬超は、本来はひとりでいることを好み、そして砂漠に立つ一本の木と孤独に対話をして、斬る、という場面がたびたび描写される。[9] そうした気質に加えて、一族皆殺しという惨事に見舞われ、戦乱の世に身を置く意義を見つけることができなくなった馬超は、「暗い眼」をして遍歴し、戦乱の世を「どうでもいい」「関心がない」と言い、ついには「乱世に背を向ける」ことになる。[10] 馬超が密かに羌族の山中に隠棲する際に、劉備は、「二人きりで語り合ったことも、ほとんどなかった」（北方（十一）「戦塵の彼方」一〇八頁）と独りごちて述懐する。それは政治的・思想的な意見の対立があったということではなく、馬超とは意見を交わす共通の土台すらなかったことの謂いである。戦乱期に問われるべき多くの二項対立的命題、例えば尊皇思想と易姓革命、野心と忠義、才能と仁徳への賛否について、馬超が誰かと競合し論争することはない。張飛・簡雍・袁綝といったごく一部の人物を除けば、馬超はともに語り合う内面性の土台を有さず、大多数の登場人物とはねじれの位置にある。馬超は多くの登場人物たちと同じ時間と空間にありながら、ときに不協和音すら奏でることなく互いにすれ違ってゆく。

北方『三国志』の馬超にねじれの位置をもたらす最大の要因は、組織・集団による戦乱の渦中にありながら、あまりにも「個」であることしかできない、という馬超の精神性にある。その構図は、周到に張り巡らされた虚構、すなわち馬騰・牛志・張衛・袁綝といった周辺人物との邂逅によって物語中に堅牢に構築される。一人目、父・馬騰を馬超は敬愛している。しかし、幼少から「馬騰の息子」としての振る舞いを周囲から求められることに対する違和感が、馬超の「個」のアイデンティティーを揺るがし、社会や組織への疑念を深めて「ひとりでいること」への嗜好を育む温床となった。そして尊皇思想に傾倒して老いてゆく馬騰の晩年の姿を目の当たりにしたことが、権威やイデオロギーへの依存に対する馬超の違和感を先鋭化させる。二人目、董卓の末裔であることを恥じる牛志に、馬超は、「俺と、馬騰も違う。おまえと、董卓も違う。俺は俺で、おまえはおまえだ」（北方（八）「曇天の虹」二六七頁）と喝破する。三人目は、前述した張衛である。五斗米道という組織の魔力から逃れられずに薄汚く零落してゆく張衛と、組織や争乱の世から乖離して澄んでゆく馬超、というネガとポジのコントラストは、「夢」「志」という主題と併走する北方『三国志』のもう一つの軸であり、物語を支える重要な支柱で

ある。四人目の袁綝は、皇帝を僭称して滅んだ袁術の娘であり、伝国の玉璽を密かに受け継いでいた。そうした出自を意に介するアンテナを有さない馬超は、伝国の玉璽を真っ二つに斬って捨て、互いに共感を持ちうる相手として袁綝を妻とする（北方（十一）「戦塵の彼方」）。この四名は、いずれも強烈なイデオロギーや組織、もしくは血縁との濃厚な関係性にまみれて生きざるを得ない人生を歩む点が共通する。彼らは、どこまでも「個」を志向する馬超のメンタリティーを浮き彫りにするための装置である。そして最後には、馬超は息子の馬駿白に、「馬超の息子」として何かを背負わされるのはかわいそうだ、として息子自身の生き方を選べるよう心を配る（北方（十三）「遠き五丈原」）。牛志への「俺と、馬騰も違う」という言葉を裏付けるかのように、息子との関係においてもお互いが「個」であることをゆるがせにせず、家族との平安の場がもたらされたことになる。しかし、そのささやかなコミュニティーは、乱世とはパラレルワールドの羌族の村落でしか実現されない、ユートピアへの逃避による救済の幻影でもある。ここをもって、馬超の「個」のアイデンティティーを模索する旅はオープンエンド的に息子に委ねられて収束し、それはそのまま北方『三国志』の物語の終幕ともなる。

物語の最末尾、「五丈原はここから遠い、と馬超はなんとなく考えていた」（北方（十三）「遠き五丈原」三一七頁）という一節は、長大な物語に渦巻く熱い感情[11]からあまりに遠い。あらゆる人物や出来事と本質的に交わることがない馬超は乱世の傍観者となり、悲壮なクライマックスである五丈原の戦いの輪郭すら模糊とさせる。馬超の感覚についてしばしば用いられる「なんとなく」という表現（北方（六）「辺境の勇者」、（十三）「敗北はなく勝者も見えず」）は、曖昧だが自分自身だけのものである感覚への忠実さであり、厳格な評価・判断を求める社会・組織・イデオロギーへのアンチテーゼでもある。北方氏は、様々な「夢」を持つ人を描き、彼らが戦う理由が単一ではないように描くが（北方『英傑』一七五頁）、「夢」を見ることすらない人物を設定し、そこに名だたる猛将・錦馬超を配した意外性は秀逸だ。馬超に特殊な視座を与えることは、執筆当初から意図されていた[12]。それゆえに、「馬超とぶつかった者が、触れてはならないものにでも触れたように、次々と馬から落ちていく。曹操は息を呑んだ。呂布以来だ、と唸るような気分で思った」（北方（八）「乱世再び」一九三頁）という一節は、呂布との既視感を活用した物語内のリアリティー付与による勇猛さの描写にとどまらず、乱世からドロ

ップアウトしてゆく馬超の鋭利で危機的な精神性を予感させるメタファーとしても際立っている。組織やイデオロギーの鎧を脱ぎ捨て、「切って血の出る」[13]生身の「個」として登場した馬超は、古典世界の物語に攪乱され、また古典世界を現代的感覚によって攪乱する。社会や組織に対して、常に「個」として向き合うという生き方しかできず、実存の疎外感の痛みを突き詰めすぎた結果、馬超は他の「個」との関連性を構築できなくなり、「凄惨な」笑い顔を見せて（北方（九）「新たなる荒野」）乱世の物語の外郭へとドロップアウトした。

いかなる困難を前にしても変わることなく「夢」と「志」を能動的に追い続けた劉備と諸葛亮の美しさと滅びの外郭に、変わりつづけて傍観者となる馬超の哀しさと救済を配する構図は、すぐれて現代的なプロットである。確かに、吉川英治『新・平家物語』の麻鳥と蓬子の夫婦のように、長編小説には権力者の栄枯盛衰を周辺から見つめる眼差しが間々設定される。しかし、北方『三国志』の馬超は、「個」であろうとするあまり他の「個」との関連性を拒み、その結果、「個」の相関によって物語内のリアリティーを構築する北方『三国志』の核心をも破壊しうる立ち位置にいたっている点が特異である。他人と価値観を同期させることに関心を持たない馬超は、北方『三国志』自身の「夢」「志」という主題と、物語内のリアリティーを確立する仕組みまでも相対化するメタな視点のパラダイムを提示し、従来の「三国志」の物語構造とは異なる眺望を提示したと言えるであろう。

八、結語

北方・宮城谷『三国志』はともに正史準拠を標榜しつつ、軍事と政治の両極の物語として、従来の「三国志」の古典文芸的な側面からの脱却を目指した。年齢・歳月による成長・変化という視点は両作品に共通するが、数値の明示や女性キャラクターにおけるリアリティーについては、宮城谷『三国志』は正史に基づく姿勢を明確にし、北方『三国志』は大胆な架空を交えて登場人物たちに躍動感や日常性を付与する、というベクトルの相違が見られる。そして、物語内における人物の判断・行動の基準、すなわち登場人物自身にとってのリアリティーを何に求めさせるかという技法には、より判然たる相違が

存在する。宮城谷『三国志』は、春秋時代以来の政治的・思想的な脈絡をたどることにより、後漢末・三国時代の人の視界の再現を志向する。一方、北方『三国志』は、登場人物を史実の脈絡で拘束せず、物語内での関係性のみをリアリティーの来源として、現代人の視線による物語を奔放に描くことを主眼とする。北方・宮城谷両氏の「リアリティー」の意味するところは、かたや物語内での完結性の構築による現代的感覚の物語の創出であり、かたや物語外への典拠の追求による古典的世界観の再現である、という相反的な位相にある。

こうした構図のうえに、北方『三国志』の馬超像はひときわ異彩を放っている。馬超は「個」であることを推し進めるあまり、他の「個」との関連性を構築することができず、戦乱の世という物語の枠組からドロップアウトする特殊な立ち位置にある。それは登場人物の「個」と「個」の関連性によって物語内のリアリティーを確立する、という北方『三国志』の構造自体を相対化し、ひいては乱世を描いてきた従来の数多の「三国志」の物語の総体をも相対化するメタな視点のパラダイムを提示している。この点において、北方『三国志』は、古典文芸には存在しえなかった現代的な「三国志」の世界に踏み込んだと言えるであろう。

本稿は考察対象をリアリティー構築の思想と技法に絞ったため、他の多くの論点には触れていない。北方・宮城谷『三国志』の人物や歴史的事績に対する評価の視点の相違、「尊皇思想」「夢」「志」という主題、曹操・劉備・諸葛亮の人物形象や新たな呂布像の提示、宗教への眼差し等、比較して論じるべき事柄は多い。また、両氏の作家としてのキャリアと作品執筆時の社会状況を踏まえて、吉川英治から陳舜臣を経た「三国志」の長編小説の系譜上での位置づけについても考察されねばならない。これらの点については、稿を改めて論じることとしたい。

注

(1) 北方『三国志』は、陳卓然「日本近代における『三国志演義』の改作と研究について」（博士論文（長崎大学）、二〇一八年三月二十日）によれば原稿用紙六千五百枚、『僕らの三国志大全　ゲーム・小説・マンガ・映像完全ガイド』（綜合図書、二〇一三年一月、七〇頁）によれば原稿用紙七千三百枚以上とする。宮城谷『三国志』は、宮城谷昌光『三国志（第十二巻）』（文春文庫、二〇一五年）の湯川豊「解説」（四四九頁）によれば、五千八百枚である。なお、本稿の引用は、宮城谷昌光『三国志（全十二巻）』は文春文庫（二〇〇八～二〇一五年）に、北方謙三『三国志（全十三巻）』はハルキ文庫（二〇〇一～二〇〇二年）に拠り、筆者名と（　）内に巻数を示す。また、北方謙三監修『三国志読本　北方三国志別巻』（ハルキ文庫、二〇〇二年）は北方『読本』、北方謙三『三国志の英傑たち』（ハルキ文庫、二〇〇六年）は北方『英傑』、宮城谷昌光『三国志読本』（文藝春秋、二〇一四年。本稿での引用は、文春文庫、二〇一七年に拠る）は宮城谷『読本』と略称する。

(2) 宮城谷氏は、「始めた当初は、『三国志』を書く部屋に入るのが辛くて、しかも進まない」（宮城谷『読本』一九～二〇頁）、「一巻目から三巻目くらいまでは、書いていて辛くて、辛くて仕方がなかった」（宮城谷『読本』八二頁）と述べる。

(3) 北方『読本』一五頁、および宮城谷（一）「後漢という時代」三七六頁、宮城谷『読本』七八頁、参照。

(4) 袴田郁一氏は、赤壁の戦いにおける東南風のリアリティーについて、北方『三国志』は予知可能な自然現象として解釈し、宮城谷『三国志』は史実ではないとして削除している旨、指摘する。（「大衆と伍す英雄――吉川英治『三国志』における諸葛亮像の形象」「注二」、三国志学会『三国志研究』第十三号、二〇一八年九月）

(5) 小説ではないが、曹騰、梁冀、党錮の禁から晋の天下統一、竹林の七賢までを対象とするものに、松枝茂夫・立間祥介監修『三国志（Ⅰ～Ⅴ・別巻）』（徳間書店、一九七九年）がある。

(6) 北方『三国志』は、曹操・孫策・周瑜・曹丕・司馬懿等が愛欲に耽溺する嗜好も、彼らのプライバシーや性癖を印象付けるためにしばしば描写する。

(7) 例えば、宮城谷（九）「遼東」は、陳羣が曹叡を諫める上奏文を三篇立て続けに記載する。

(8) 北方氏は、「やはり日本人の小説読みは、過去にあったものを現代小説の中に求めるべきではなくて、現代小説はそれをどれほどリアリティーをもって書いたのか、という発想で読むべきだろう、と僕は思います」（北方『読本』二〇頁）と述べる。一方、宮城谷氏は「できるかぎりリアリズムで、（略）その当時生きていた人がどのように生きたのかを正確に書きたかったのですね」（宮城谷『読本』二二四頁）と述べており、両氏が対照的な視座で「リアリティー」を定義して『三国志』の創作にあたったこ

とがわかる。

(9) 北方『三国志』において、馬超がひとりでいることを好むことは、(八)「乱世再び」、「曇天の虹」、(九)「たとえ襤褸であろうと」、(十)「去り行けど君は」、(十一)「戦塵の彼方」等で言及される。また、木と向かい合うことは、(六)「辺境の勇者」、(八)「乱世再び」、(九)「たとえ襤褸であろうと」、(十)「遠い明日」、(十三)「山に抱かれし者」等に描かれている。なお、北方『三国志』では劉備・関羽・曹操・周瑜・張衛・諸葛亮・司馬懿等、主要人物の多くに「ひとり」という言葉を用いており、人物形象の重要なキーワードの一つであると言える。

(10) 北方『三国志』において、馬超が暗い眼をしていることは、(九)「たとえ襤褸であろうと」、(九)「荊州の空」等に見える。また、時勢への無関心は、(十)「去り行けど君は」、(十一)「戦塵の彼方」等に見え、乱世に背を向けることは(九)「新たなる荒野」、(十)「去り行けど君は」、(十一)「戦塵の彼方」等で言及されている。

(11) 飯田亮氏は、北方『三国志』の「英雄」たちの感情が豊かである点が「人間として非常に魅力的である」と評する。(北方(十三)「現在に蘇る「気迫」と「志」の男たち」、三一八頁)

(12) 北方氏は馬超について、「僕は、最後まで生き残らせて、三国時代が何だったかというものを馬超にしっかり見極めさせようという気持ちが強かった。だから、馬超は最初からそういう人間として、僕の中で設定してありました」(北方『読本』一四頁)、「精神主義者で、権威にがっつかない」(北方『読本』五七頁)と述べる。

(13) 石井冨士弥氏は、北方氏が『武王の門』によってハードボイルド小説から「歴史小説」へと創作のフィールドを移した際、「読者をして自ら行動しているような臨場感に立ち会わすことによって、はじめて切って血の出るような今日性も説得力もうまれよう」(「北方謙三『武王の門』「解説」新潮文庫、一九九三年、四四九頁)と評した。なお、石井氏は『武王の門』を「歴史小説」とみなしており、宮城谷氏の「歴史小説」の定義とは異なっている。

本稿は、慶應義塾の平成三十年度大学特別研究期間制度適用者に対する特別研究費による研究成果の一部である。